

Title	生命の経済学
Author	瀬戸口, 明久
Citation	経済学雑誌. 別冊. 110 卷 1 号
Issue Date	2009-04
ISSN	0451-6281
Type	Learning Material
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経済学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

生命の経済学

瀬戸口明久

「生命経済学」は2009年度前期から新規に開講する科目である。これまで日本の大学で「生命経済論」という科目を持つ大学はなかった（たぶん外国でもないだろう）。それは「公共経済学」や「開発経済学」のような科目と違って、「生命経済学」という経済学の一分野は存在しないからである。したがって「生命経済学」を専門とする経済学者はいないし、「生命経済学」というタイトルの教科書もない¹⁾。おそらく受講生の皆さんも、「生命経済学」がどのような科目なのか見当もつかないだろう。そこで本稿では、「生命経済学」がどのような内容についてあつかうのか、そしてどのような視点で講義をおこなっていくのか述べておきたい。受講生の皆さんには、講義がはじまるまでに、どのような科目なのか大まかなイメージを持ってもらえれば幸いである。

「生命経済学」という科目が生まれるまで

そもそも「生命経済学」という科目は、どのようにして生まれたのだろうか。まずは記録を残しておくという意味も込めて、歴史的な経緯を簡単に述べておこう。

本科目の出発点は、2002年に本学部のメンバーを中心として発足した「バイオエコノミクス研究会」（代表：佐藤光教授）にある。この研究会は経済学者だけでなく、医療人類学者や医療社会学者、倫理学者など、多様な分野から構成されるユニークな研究会だった。初年度の研究成果は、『経済学雑誌』第104巻第2号・第4号（2003年）に特集として発表されている。その後、研究会は科学研究費補助金の助成などを受けて継続され、2007年には著書も出版した（佐藤光編『生命の産業——バイオテクノロジーの経済倫理学』ナカニシヤ書店）。そのあいだ2005年に私が本学部のスタッフとして赴任し、「生命経済学」が正式な科目としてスタートする体制がととのった。なお大学院の方では、美馬達哉講師（非常勤）による「生命経済学研究・同演習」が開講された（2003～05年度。08年度以降は瀬戸口が担当）。

私の本来の専門は「科学技術史」である。理学部で生物学を学んだのち、文学部に移って科学史・科学哲学を専攻し、生命科学の歴史を研究してきた。経済学を正式に学んだ経験はない。「科学技術史」は理科系の分野と思われるかもしれないが、実際には経済学とも深いかわりを持つ学

1) 1970年代の「生命系の経済学」や最近の進化経済学のように、経済学に生命科学の知見を持ち込んだ研究はこれまでもあった。けれども本科目は、それらの研究とは視点が大きく違っている。本科目の目的は、経済学と生命科学を融合することではなく、社会の側から生命科学を考えるという視点を身につけることにある。

問である。産業化した社会においては、科学技術が果たす役割はきわめて大きい。そのため科学技術史の専門家が経済学部のスタッフになることも珍しいことではない。たとえば本学では、本学部の教員だった中岡哲郎、商学部の教員だった原光雄、加藤邦興などが、産業技術論や公害論で重要な仕事をしてきた²⁾。もっとも彼らは化学工業のような工学系の技術の専門家であって、私のように生命科学をあつかってきた者が経済学部のスタッフになった例は、おそらくこれまでなかっただろう。

このこと自体、最近の生命科学の大きな変化を反映している。かつて生物学とは、生き物を採集して分類したり、生命活動の仕組みを調べたりする地味な学問であった。けれども1970年代に遺伝子操作が可能になってから以降、生命科学は医療や農業に大きなインパクトを与えるようになった。いまや生命科学はテクノロジーとなり、産業界に大きな利益をもたらすことが期待されている。その一方で、生命科学がさまざまな社会的問題を引き起こすことも懸念されるようになった。本科目では、そのような「生命科学と社会」のあいだに起こるさまざまな問題を取り上げて論じていく。

この講義の内容と視点

では生命科学が引き起こしている社会的問題とは、どのようなものだろうか。この講義で取り上げる問題群は、「医療」と「環境」の2つの領域に分けることができる。講義計画は以下の通りである。

ガイダンス：生命科学と社会

理論編：科学技術と市民

応用編Ⅰ：医療をめぐる諸問題

治療と改良のあいだ（1）遺伝子診断とヒトゲノム計画

治療と改良のあいだ（2）優生学

治療と改良のあいだ（3）脳神経科学とサイボーグ

人体の資源化（1）人体を展示する

人体の資源化（2）脳死と臓器移植

人体の資源化（3）生命の特許化

応用編Ⅱ：環境をめぐる諸問題

生命とリスク（1）水俣病という経験

生命とリスク（2）遺伝子組み換え作物

資源としての生命（1）近代日本の捕鯨

資源としての生命（2）近代日本の狩猟

遺伝子資源と国際政治（1）イギリス帝国と植物学

遺伝子資源と国際政治（2）帝国日本とイネ

遺伝子資源と国際政治（3）生物多様性と南北問題

おわりに：市民参加論を超えて

2) 中岡哲郎は1976年から92年まで本学で産業技術論を担当した技術史家。最近、『日本近代技術の形成』（朝日新聞社、2007年）を上梓した。原光雄は1952年から1973年まで商学で化学史を研究した。加藤邦興は1975年から2001年まで商学で技術論を担当し、化学工業史や公害研究で多くの業績を残した。

まず「医療」をめぐるのは、生命科学の発展にもなって生まれた先端医療が問題になっている。「先端医療」とは、現在では実験的な段階だが、将来的には多くの患者を救うことになると思われる治療法のことである。遺伝子治療、ゲノム医療や再生医療のような先端医療については、しばしばニュースになるので聞いたことがあるかもしれない。臓器移植も日本ではまだ十分に定着しているとは言いがたいので、先端医療に含まれる。

現在、先端医療の問題点として特に議論されているのは、これまでの「病気」や「治療」の概念が根底から変わってしまうということである。たとえばヒトゲノム研究によって、私たちは病気にかかるリスクを遺伝子レベルで知ることができるようになってきた。つまり、いま発症しているかどうかは関係なく、将来的な発症リスクを予測することが可能になったのである。となると、個人が持つ遺伝的な資質によって評価されたり差別されたりする可能性が出てくる。実際に病因遺伝子の保有者が保険加入において差別を受けるといった問題が生じている。

もう一つの問題は、先端医療によって「所有」のあり方が大きく変わりつつあるという点である。臓器移植の発達によって、一部の開発途上国では臓器売買が横行している。先進国でも、人体由来の細胞や遺伝子が特許として認められるようになった。そもそも特許とは人工的な発明に与えられるものなので、生物や人間に適用されることはなかった。だが最近では、人体とモノとの境界が不明確になっている。このような人体の資源化・商品化という事態をどのように考えたらよいのだろうか。

以上のような問題群に続いて、この科目の後半では「環境をめぐる諸問題」について検討する。環境問題には、地球温暖化のようなグローバルな問題からリサイクルのような身近な問題まで、非常に多くの問題が含まれるので、そのすべてをあつかうことはできない。この科目では次の2つの問題群をあつかう。

一つは「リスク」をどう考えるかという問題である。近年、生命科学がかかわるリスクの問題が社会的な注目を集めるようになった。たとえば遺伝子組み換え作物のリスクをめぐるのは、安全性を主張する科学者と、批判的な専門家、不安を持つ市民など、さまざまな考えがある。そのような場合、遺伝子組み換え作物を導入すべきなのだろうか。もしくは規制するならば、どのようなシステムを構築すべきなのだろうか。こうした専門家のあいだでも議論がわかれている「リスク」の問題について、最近の科学技術社会論の研究動向を踏まえて論じていく。

もう一つは、生命を「資源」としてどのように利用していくべきかという問題である。たとえば現在、日本政府は商業捕鯨の再開を強く主張しているが、自然保護団体や欧米諸国に阻まれている。日本政府は捕鯨は伝統文化の一つであるというが、実際には近代的な産業でもある。また、最近では動植物の遺伝子が品種改良や製薬に利用できるため、先進国の企業が遺伝子資源の探索に乗り出している。こうした生物資源の開発と産業との関わりについて歴史的に見ていくことによって、現在の自然保護や農業のあり方について考え直してみたい。

以上のような「医療」「環境」の諸問題については、これまで経済学のなかでも論じられてこなかったわけではない。けれども本講義では、経済学的な視点にはこだわらないことにしたい。講義のおもな内容は、「科学技術史」「科学技術社会論」の知見をもとに、「医療社会学」「環境社会学」などの議論も取り込みながら話していく。もちろん経済学を無視するわけではない。たとえば生物資源の問題などは、開発経済学や経済史でも論じられているので参照する。けれども、あまり学問分野にとらわれない講義だと考えておいてもらいたい。

むしろこの講義で大切にしたいのは、一般市民の目線である。これから先、受講生の皆さんが生命科学と出会うとしたら、何かの専門家として向き合う可能性は低いだろう。むしろ先端医療の利用者として、あるいは遺伝子組み換え食品の消費者として、あるいは環境問題に関心を持つ一市民として生命科学と出会うはずである。

最後にもう一つ、この講義で大切にしたいのは、歴史的な視点である。過去を知ることによって、どれだけ現在の見方が変わるか、そしてより深く考えることができるようになるか、実感してもらえるような講義をしていきたいと考えている。そのときに生命科学の専門家の言うことを鵜呑みにするのではなく、彼らの言説をある程度批判的に読み解きながら、「生命科学と社会」の望ましい関係について考える姿勢を身につけることが、この科目の最終的な目標である。